
幸せの基準

melmo

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの基準

【Nコード】

N4180S

【作者名】

memo

【あらすじ】

幸せの基準が同じだったらいいね - 気遣い屋でへたれな秀人と同じように気遣い屋な恋人、愛奈。二人がホントに欲しい幸せは何かを考えた気づいたりして成長していくストーリー。

前触れなんて無い

「でね、その相手に良く思われたい一心で服とか靴とかにお金全額使っちゃったんだって。」

「へえーそんな外見てか服とかそんな注目しねーけどなあ。」

「えー！じゃあ私が何着てるかとかも見てないの？」

「いやーそれは、そんなことはないけど。ってか何？その子の事批判しちゃダメだったの？」

「うん感心してほしかった。」

「感心？」

「好きな相手のためならそんぐらい必死になるんだって。」

「んーまあそれはそうだなあ。」

言葉選びに失敗してしまったみたい。

めずらしく愛奈が拗ねた。

喜ばせようと思って、うなずいたことが裏目に出る。

じゃあなんて言うのが正しいかったんだなんて言いたくなるけど、そんなこと言ったらおしまい。

少しでも、話に共感したいのに、

こうやって一つ失敗するだけで焦るのは

好きな証拠なんだろうな。

「そつえばさ、今日、」

「秀？」

はなし始めた途端、背後から名前を呼ばれる。

振り向いた瞬間、思わず目を閉じた。

「秀、なんで電話もメールもしてくれなかったの？ていうかここで何してんの？」

「え、あつ、いや・・・わるい、ごめん、またあとでな」

「この子だれ？」

「え、あー」

「お兄ちゃん、私席外すね。」

お兄ちゃんと咄嗟に言う愛奈、

焦りをほぐすために口に流し込んだコーヒーを思いっきり吹いた。

「なんだ妹さんだったの？秀、早く言つてよ。」

はじめまして、お兄ちゃんの恋人の美奈子です。よろしくね。」

「あ、愛奈です。よろしくお願いします。」

あたまが真つ白。目の前に

本当の恋人と、偽の恋人。

本物が愛奈で、偽が美奈子。

なのに本物の愛奈が偽わって妹になって

偽者が図々しく恋人になって、

そして否定せずに沈黙する柊秀人がいて。

「ひで、折角会えたんだからどつか行こ」

「いやゴメン。今日は愛奈と出かけるから・・・」

「いいよ、お兄ちゃん。私のことは気にしないでいいから行つてきて。」

なんで愛奈、満面の笑みを浮かべるんだろう？

嫌味とかウソが全く見えない、嫉妬の香りさえしない笑顔で

サラリといいのける。

「いや、でも今日は本当に」

「妹ちゃんも一緒に遊ぼうよ。せっかく出会えたんだし。そうだ。

私のバイト先に行こう。かわいいものがねいっぱいあるの。一緒に見よ。」

「いや、悪いですから・・・」

「なんでー私ね、一人っ子だから姉妹で買い物とかしてみたかったの。なんなら今日は秀必要ないくらいだよ。」

「はぁ・・・」

愛奈が本気で困ってる。

俺が助けなきゃいけないんだけど、急展開にひたすら閉口。

「秀さつきからずっと黙ってる。何？そんなに兄妹の邪魔されたくないかったわけ？」

「うーん・・・ていうかホント今日はさ、両親の結婚記念日だし二人で計画練りたいんだ。だからごめん。また別日にしよう？」

「えー妹ちゃんとも？」

「ああ、うん。」

「そう・・・じゃあ仕方ないか。まあ本当はさ今日どうせ合コンだったから、妹ちゃんを唆してメンバーに連れて行きたかっただけなんだけどね。」

「ふーんそつか。」

「お兄ちゃんがこうも固いと無理だね。」

「あはは」

「じゃあねー」

嵐のように去っていった奴。

そして残された散々すぎる傷跡。

「愛奈？」

「ん？」

「悪かった。」

「何が？」

「あの女はさ、別にそんなんじゃない」

「やめよう。そうゆうの、聞きたくないし興味ない。」

「へ？」

「あつもう4時だ。じゃあ私帰るね。」

「送るよ。」

帰り道、いつもより早い帰り。4時って。

今日は愛奈がバイトだから仕方ないってわかってるけど、

このまま帰って大丈夫なのか。

このまま離れて大丈夫なのか。

弁解や言い訳の言葉が頭で回ってる。

でもそれを聞きたくないと一瞬で遮られたら

言っちゃいけないんだと思う。

さっきと同じように

何も無かったみたいに

くだらない話をして笑ってる

隣に居る愛奈は

本当は俺の事なんか

どうでもいいのかな。

じゃあ気をつけてね、って言って

家の扉が閉まる。

どうしようもない虚無感が

襲ってくる。

このままずっとあの扉が

開かないままだったら

どうしよう。

前触れなんて無い（後書き）

全く行き先が見えない↑でもとりあえず書きたくて書いた。うん、
書いただけエライ。一歩踏み出した！

嘘の連鎖

憧れていた日々は幻想だったのかな。

扉を閉めた瞬間、涙が落ちた。

良かった。今まで耐えてたんだよね。

秀人を困らせたくない。

秀人に嫌われたくない。

その一心で、ついた嘘。

強がって聞きたがらなかった言い訳。

言い訳でも聞けばよかったんだけど、

そんなものなくても私はあなたを好きだよって
受け入れられたほうが

あなたは笑ってくれるかな、って思ったんだ。

嫉妬なんてするような、そんな女にはなりたくないって
恋人になる前に私の中で決めてたから。

理解あるフリをしたんだ。

だけど、伝わってないよね、秀人には。

時々ふざけて呼んでいた「お兄ちゃん」という単語。

そう呼ぶと照れつつも喜んでいたあの笑顔。

そんなオママゴトのようなことも、

二人の間では十分楽しかったのに。

まるで現実になった今日。

ママゴトじゃない。

私は妹役。彼女は恋人。お兄ちゃんの恋人。
あの時秀人は何役を演じたかったのだろうか。

彼女は嘘に気づいていた。きっとそう。

だけど、彼女は嘘を笑って受け入れた。

そしてすぐに去って行った。

私はあんな風になりたいのに。

彼女を傷つけた、秀人と一緒に。

そして秀人まで傷つけた。

傷つけない方法なんてないのかな。

いつでも笑顔、なんて無理なんだろうか。

理想ばかり描いてたのかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4180s/>

幸せの基準

2011年10月8日23時55分発行